第３章 令和5年度『児童生徒のICT活用の実践』

第1節 研究動機およびスケジュール

1 研究動機および目的

令和3年度は「授業」でのICT機器活用方法、令和4年度は「場面を絞った」ICT機器活用方法について発表や意見交換を行い、どのような方法および場面において、より効果的な活用ができるか検討し研究を行ってきた。

今年度は、学校生活における様々な場面において、児童生徒に対してICT機器を活用した支援の実践を行い、研究を行う。授業だけでなく、様々な場面における児童生徒の課題を挙げ、それに対するICT機器活用の実践を行い、その成果と課題についての意見交換を行うことで、全教員がICT機器活用の実践方法を学び考える契機となり、ICT機器を活用した支援の向上をめざす。

2 スケジュール

全校研究日として計3回を設け、その中で児童生徒のICT機器活用の実践方法の検討、経過報告、全体での事例報告検討を行う。

（資料）

全校研究日①	7月	・グループで、児童生徒に対するICT機器を活用した支援方法について話し合う。 ・実践方法について検討する。 ・2学期以降、児童生徒に対して実践を行う。
全校研究日②	11月	・実践の経過等について、グループ内で報告検討を行う。
全校研究日③	2月	・小中高での合同グループに分かれ、実践事例についての報告および意見交換を行う。

第2節　研究報告

1.全校研究

（1）小学部の報告

①報告グループ:7グループ
②使用場面:学習場面1、登校後の準備2、給食前後3、コミュニケーション1
③使用機器:全グループがタブレット型端末（iPad）
④ICT機器を使っての使用方法:アプリ（「Keynote」、「やること」アプリ、タイマー、動画など）
⑤児童生徒の実態:視覚支援が必要である、集中が難しい、準備に時間がかかる、場面に合った行動が難しい、人との距離感・気持ちのコントロールが難しい、すべき内容を忘れてしまう
⑥各報告書（抜粋）

小1 使用機器:タブレット型端末 ＜対象生徒について＞ 身辺面などできることが多いが、経験が少なく理解が難しいため、視覚的支援が有効。 ＜支援の手立て＞ 「Keynote」で作成した台ふきの仕方を提示する。手本を示したり、言葉かけをしたりする。
【様子および効果】 初めは、教員の言葉かけと共に「Keynote」で作成した台ふきの手順を見て行った。何回か繰り返し行うと教員の「うえ、した、うえ、した」という言葉かけで、両手で雑巾を持って机を拭くことができた。 今では、iPad の視覚支援を必要とすることなく行うことができている。 最初に視覚的に台ふきの方法を提示していたことで、イメージしやすく、体でも覚えやすくなったと考えられる。本児の取組みをとおして、周りの児童にも影響があり、同じように取り組むことができた。
【今後に向けて】 手作りカード等に比べ、イラストに動きがつけられたり、児童がカードに執着せずに教員主導で使用したりすることができる、児童が興味をもちやすい等の点が利点である。その利点を生かして、児童の実態や必要に応じて ICT 機器を活用して児童の指導につなげていきたい。

小2 使用機器:タブレット型端末 ＜対象生徒について＞ 複数児童を対象とする。 ・朝や下校の準備で、各手順は一人で行える。 ・途中で気持ちが他のことに向かってしまうなど、準備に時間がかかる。動作や次の手順への切り替えをスムーズに行えるようになってほしい。 ＜支援の手立て＞ アプリ「やること」や「Keynote」で手順書を作成する。児童一人一台ずつのタブレット端末を教員が持っておく。教員と一緒にタブレット型端末を見ながら、手順を確認したり、終わった項目に「おしまい」のチェックを入れたりする。徐々に一人でタブレット型端末を見ながら行うことができるように支援を減らしていく。 ・手順を視覚的に見通したり、「おしまい」のチェックや表示される画面を児童の興味関心に合わせることで、楽しみながらスムーズに準備を行えるようにする。

【様子および効果】
（メリット）
・できた項目の☆を押して次に記載されている項目を見て自分で確認することが定着できた。途中で遊ぶことも少なくなった。押すと音がなるのも良かった。教員の言葉の録音にも反応し、自分から言葉を言いながら進める場面もあった。
・やることを済ませて戻ってくることが多くなった。
・時計機能を追加すると、時計に関心をもつことができた。
・アクセシビリティ設定を行い、子どものタッチできる範囲を設定することができた。
（デメリット）
・アプリを自分で操作することができるが、言葉かけがないと進まない。アプリがない時と変わらない。
・周りの友だちに同じアプリを提供するが、色々なタブレット操作することに関心が強くなり、朝の用意が進まなくなった。

【今後に向けて】
・着替えの項目を増やす
「着替え」→「かごをとりにいく」「服を脱ぐ」「服を着る」等
・「Keynote」やアプリを使ってパズル風にしてみる（1つできたら1ピース）パズルの絵は魅力のあるものにする。

小5－1、5－2
使用機器：タブレット型端末
＜対象生徒について＞
・対人関係や日常の中でのモラルや人との距離感、気持ちのコントロールなどが難しい。
・発語が少ない
＜支援の手立て＞
・アプリを使用し、朝の時間に繰り返し取り組む。
・日常の中で振り返りを行う。
・教員が一緒に取り組んでいき、徐々に一人で取り組めるようにする。

【様子および効果】
・上記の内容で取り組んでみたものの、タブレット型端末よりも手作りの教材のほうが児童の発達段階に合わせた細かい調整ができるため難しく下記の内容での実践に変更した。
・自立活動の時間に『桃太郎電鉄教育版』を使った活動に取り組んだ。児童が興味をもつことができるゲームを取り入れることで、他者への意識づけや優しい言葉かけ、順番を守ることなどにつながっている様子が見られた。個人ではなく複数人で取り組むことで、話し合いや相談、教え合うなどの場面も多くみられた。

【今後に向けて】
・まだ、始めたばかりなので長期間で取り組んでいきたい。
・現在は、1台のタブレット型端末を回しているが、今後は大きなモニターに画面を映し出してみんなで共有しながらゲームができるようにしていきたい。
この内容やアプリの情報などをみんなで共有していくことが大事だと思う。

【意見交換での質問・意見】
・ルビはなかったが大丈夫だったのか？
→教員が読んで伝えた。読めてなくても何となく進めることができていた。
・何人でやっても大丈夫なのか？
→確か 50 台まで行けたと思う。授業で同時に使用できる。
・何の授業で使用していたのか？
→自立活動の時に使っていた。3 人、3 人、4 人のグループで使用していた。

小6
使用機器：タブレット型端末
＜対象生徒について＞
・一人で歯を磨くのが難しい。
・教員、または動画などの手本を見て模倣することができる。
＜支援の手立て＞
・歯磨き指導：タブレット型端末で歯磨きの手順の動画、またはアニメーションを提示する。その動画、アニメーションを手本として歯磨き指導を行う。

【様子および効果】
歯磨きの手順の動画を導入として視覚的に提示することで、歯磨きのやり方をある程度覚えることができた。
回数を重ねるごとに教員からの口頭での指導だけで歯磨きに取り組むことができるようになってきた。

【今後に向けて】
歯磨きの手順を覚え、自分自身で取り組むことができるようになったが、手洗い場から離れて教室内を歩きながら歯磨きをするようになった。ケガ等につながる危険性もあるので、歯磨きの手順だけでなく、歯磨きをする際の約束を再確認する必要がある。

【意見交換での質問・意見】
質問：タブレット型端末以外は使っていないか→タブレット端末のみ使用した。
他に活用した方法…カメラのインカメ機能を使用してリアルタイムでも活用した。
感想：日常で使う、取り入れることはなかなか難しいが ICT機器をきっかけとして他にできる支援を考えることができた。

（2）中学部の報告

①報告グループ：6グループ

②使用場面：学習場面3、コミュニケーション3

③使用機器：タブレット型端末（iPad）5、電子メモパッド1

④ICT機器を使っての使用方法：アプリ（エコミュ、タイマー、時計、Note、keynote、読み上げアプリなど）、電子メモパッドに直接文字を記入し、言葉でやり取りをする

⑤児童生徒の実態：発語がないが文字や身振りで意思伝達をする、集団に入ることが難しい、気持ちの切り替えが難しい、自分の気持ちを伝えるのが難しい

⑥各報告書（抜粋）

中1－3、1－4 使用機器：電子メモパッド ＜対象生徒について＞ ・発語が無い ・『NO』『嫌』などの思いを「あー」「うー」などの発声や両手で×印を作って伝える ・文字を手の平や電子メモパッドに書き、意思を伝達しようとする ※発語（言葉）によるコミュニケーションではなく、文字を使ってのコミュニケーションが得意な生徒 ＜支援の手立て＞ ・電子メモパッドを使って本人の気持ちや考えを確認して共感し、コミュニケーションをとって気持ちの切りかえを促す ・電子メモパッドを使ってそれぞれの要求を伝える ※いずれの場面も電子メモパッドに書いた文字を教員と一緒に読み返し、言葉によるコミュニケーションをする（しようとする）きっかけになることを期待する
【様子および効果】 ・本生徒の気持ちを二択で聞き、電子メモパッドを使って応えることができた。嫌な理由を聞くと「しんどい」「暑い」などと書き、気持ちを伝えることができ、数回やり取りをするうちに、本生徒も気持ちに折り合いをつけて行動できることが増えた。 ・『○○○おかわりください。』のカードを併用することで、自分からカードとお椀やお皿を教員のところに持って行き、教員と一緒に文字を読みながら伝えることができるようになった。
【今後に向けて】 電子メモパッドを使用する頻度を少しずつ減らし、最終的に言葉とジェスチャーでコミュニケーションをとれるように指導していく。
【意見交換での質問・意見】 タブレット型端末を使った支援も大切だが、絵カードなどデジタル教材以外のものを使用し、またジェスチャーや言葉でのコミュニケーションをとっていくことについて共有できた。

中2－1、2－2、2－3 使用機器：タブレット型端末 ＜対象生徒について＞ 中学部 1 年の際は、集団に入れずバスや小学部（排水溝、洗濯機）によくいた。集団（授業）に入るため、iPad を使用すると、教室に入れるようになった。 集団に少しずつ慣れてきており、iPad がなくても授業参加できる時間が増えてきた。

今後、使用してもよい場面以外では iPad を我慢できるよう促していきたい。
<支援の手立て>
・タブレット型端末等デジタル機器は使用する前に時間を決めて使うよう以前に教員とやりとりをする。（「ねずみタイマー」、「時計」）
・授業の見通しを簡略化して伝える。
・人との関わり（教員や友だち）を増やし、授業への楽しみや意欲へ繋げる。

【様子および効果】
・1学期はタブレット型端末がないと、不安定になる場面もあったが、2学期以降、タブレット型端末を使用せずに授業に参加することができた。文字を書くことをとおして、人とのかかわりをもつことに楽しさを感じている。

【今後に向けて】
現在はホワイトボードや紙に文字を書くことができているので、将来的に、タブレット型端末に固執せず、適切に使用することをめざしていきたい。

中3−3、3−4、3−5
使用機器：タブレット型端末
<対象生徒について>
・声を出して話すのが難しい（心理的なものによるのか）
・言われたことなどは理解しているが、自分の思いを自ら伝えるのが難しい。
<支援の手立て>
・少人数で行う授業や教員と一対一で話をする場面や本人が気持ちを伝えるのが難しい場面などで、タブレット型端末に気持ちを入力して自分の気持ちを言語化したり、読み上げ機能を用いたりして、周囲に伝える方法を知る。

【様子および効果】
（メリット）
・頑張った授業のこと等を絵文字つきで入力し、再生することで帰りの会で感想を発表することができた。
・追加で質問（授業内容や本人の好きな給食についてなど）も読み上げアプリで入力して意思を表出することができた。
・本人のことを更に知ることができた。
・筆記よりも早い。
（デメリット）
・youtube を見てしまう。他の生徒に指摘されたり、帰りの会にも見てしまったりすることがあった。

【今後に向けて】
「YouTube」を見ることが本人の目的になっていないか、「話すためのツール」としての iPad 利用ということを改めて認識する必要がある。普段パソコンや iPad 等を十分に触る機会のない生徒にとっては娯楽のための機器になってしまい、目的を失いがちになりやすい。依存性が強いので、デメリットの方が大きい場合もある。読み上げアプリを利用するメリットは大いにあるので、今後はルール作りや iPad の設定を変更する等して工夫して使用する。

（1）高等部の報告

①報告グループ：8グループ

②使用場面：登下校時2、休み時間2、朝の会・帰りの会1、給食後1、移動時1、コミュニケーション1

③使用機器：全グループがタブレット型端末（iPad）を使用、モニター併用1

④ICT機器を使っての使用方法:アプリ（動画、画像、タイマー、時計）音声再生機能を利用

⑤児童生徒の実態：発語はあるが返事や挨拶が難しい、自分の気持ちを伝えるのが難しい、動作に時間がかかる、時計を見て行動が難しい、発語が不明瞭なため意思疎通が困難、授業場所や担当教諭の定着が難しい

⑥各報告書（抜粋）

高1－1・1－2 使用機器：タブレット型端末 ＜対象生徒について＞ エコラリアがあり、指示待ちタイプ。支援度が高い ASD。 ＜支援の手立て＞ タブレットのアルバムの動画を見て手順を確認して自分から準備ができるようになる。
【様子および効果】 ・指示があると画面をタップして見ようとはするが紙シートの絵カードと同じく自分からの行動には結びつかなかった。またデメリットとして他生徒が勝手にタブレットを触ってしまう様子が見られた。
【今後に向けて】 ・指示を口頭・指差しなどでシンプルにして、行動を促す方が本生徒にはモチベーションとなるようだ。（指示待ちになりがちではあるが、生身のコミュニケーションの方が行動に結びつく）

高1－3・1－4 使用機器：タブレット型端末 ＜対象生徒について＞ ・発語は喃語で、自分なりの表現（単語）をする。 ＜支援の手立て＞ ・発語練習としてタブレット型端末を使い、繰り返し練習する。 ・遊び場所の選択は遊び場所の画像を提示して選択する。
【様子および効果】 （メリット） 以前、ハサミが欲しい時にチョキンとしか言わなかったが、声で手本を見せると「ハサミかしてください」と言うようになった。 （デメリット） タブレットを持たせておくと絵を描いたり、他のことに使ってしまい遊んでしまう。
【今後に向けて】 今後も引き続き、使える単語を増やしていきたい。
高1－5・1－6 使用機器：タブレット型端末 ＜対象生徒について＞ 発語はあるが、出席確認の返事や挨拶が難しい。

<支援の手立て>
音声再生機能等を利用して、ボタンを押して返事や挨拶ができるよう促す。
継続して行うことで自発的な返事や挨拶につなげたい。

【様子および効果】
ボタンを押すと「おはようございます」と流れる。
９月：初めはとまどった様子もあったが、ボタンを押すという行為は継続してためらわずに行っている。
10月：半ばぐらいからタブレットを使用せずとも表情や音などで返事をしようとしている。
11月：タブレットは使用せず、表情や音での返事に加え、何かしら音声での返事をしようとしている。
(「はい」という返事はまだできていない)
(メリット) 声が出るようになった。
(デメリット) 借りられなかったら実践できない

【今後に向けて】
本人の特性上決めたことはやりとおしてしまうので「はい」までは難しいと考える。ここまで変容したことは成功と捉えている。発信、発言が増えたのでこれからも様子をみていきたい。

高2−1・2−2
使用機器：タブレット型端末
<対象生徒について>
・発語は喃語、クレーンや指差しで意思表示を行う。
・絵カードを理解できているかはわからないが、カードを注視することができる。
<支援の手立て>
遊ぶ内容の選択：トイレに行った後にタブレット端末で遊ぶか、散歩に行くかを画像で提示し、本人がしたいほうの画像を指差しで選択することで意思を確認する。

【様子および効果】
(様子) タブレットの画面を注視し、昼休みの余暇時間の使い方として「散歩」か「iPad を観る」か絵をみて自分の活動を選んだ。
(メリット)
食後のトイレの後の余暇時間に iPad を使えることが分かると、行動が早くなった。(見通しを持つことができた。)
(デメリット) 次の活動が望ましくないもの (苦手や嫌いなもの) であると、行動が遅くなる (座り込んでいきたくない、と伝える)

【今後に向けて】
次の移動場所や活動写真などをタブレットで提示して、見通しを持って行動できるようタブレットを活用していく。

高2−3・2−4
使用機器：タブレット型端末
<対象生徒について>
・一つ一つの動作に時間がかかる。
・意思表示は、目を合わせて指さしをするなどしてトイレや耳栓を要求する。
・歯磨きは絵カードを見ながら行うが、時間的な区切りがなくいつまでも磨いている。
<支援の手立て>
歯を磨く個所や時間を動画で示す。

【様子および効果】
(メリット)・動画を撮影し、振り返ることで少しずつ意識付けができた。現在は言葉かけのみで次の指示に移れるようになってきている。
(デメリット)・行動後の動画での振り返りになるので、時間的余裕がとれなかった。

【今後に向けて】
・1日の流れを振り返ったり、示したりできるようなアプリがあると良い。また、タブレット型端末などの情報機器をすぐに取り出せる場所に置いておかないと咄嗟の時に対応しづらくなるのが問題である。

高2−5・2−6
使用機器:タブレット
＜対象生徒について＞
時計を見て行動することが難しい生徒
＜支援の手立て＞
設定した音を流し、生徒が着席する合図とする。音はシンプルなものが良い。

【様子および効果】
（メリット）
生徒は毎日、本実践を楽しみにして活動されていた。連絡帳を出す、給食袋を出す、着替えを出すなどのルーティーンをこなし、音楽（実践）によって着席が可能になってきている。
（デメリット）
ICT 機器を使うべき時と、使うべき時でない区別をつけるのが難しく、使うべき時でない授業などでも教員が準備したﾀﾌﾞﾚｯﾄ型端末などの電子機器を無断で触ろうとしてしまう行動がみられた。

【今後に向けて】
ICT 機器を別の手段に替えていくこと。案としては、言葉かけに加え、シンプルなブザー系のアプリや玩具を併用する。

高3−1・3−2・3−5
使用機器:タブレット
＜対象生徒について＞
発語が明瞭ではなく、意思疎通が困難な時がある。
＜支援の手立て＞
・行きたい場所の選択;行きたい場所の画面を提示しタップする
・気持ちの切り替え;タイマーの画面を提示し一緒に確認する
・行事の確認;スケジュール順や場所の画面を提示し一緒に確認する

【様子および効果】
（メリット）
タブレット型端末の画面をタップして伝えられる。
（デメリット）
タブレット型端末の持ち運びについて課題がある。

【今後に向けて】
・クラス以外（他の授業・同じグループ生徒）での運用をしたい。
・ICT 機器を常時使えない（持ち運べない）場を想定し、絵カード等のアナログな手法へ移行することも有効な手段として検討中である。

高3−3・3−4・3−6 使用機器：タブレット ＜対象生徒について＞ 授業の場所や担当教員の定着が難しく、授業間の移動で迷子になってしまう。手元に持っているものを見て動く習慣もないので定着が難しい。 ＜支援の手立て＞ 時間割を iPad で作成して、教科・クラス・主担名前を入れる。 ・主担写真を表示して次の授業を確認する。
【様子および効果】 ・効果が見られなかった。 ・持ち物の自己管理が難しいため、持ち運びが難しい。 ・興味関心がないことに対して操作を覚えることが難しく作業内容を覚えることが難しかった
【今後に向けて】 ・ICT 機器の活用に効果がなく、紙媒体での支援方法が対象生徒については合っていたので生徒の実態を把握した上で ICT 機器を活用するかを今後検討する。

第3節　まとめ

全校研究テーマ ：ICT の効果的活用

▶R5全校研究テーマ「児童生徒の ICT 活用の実践」

今年度の取り組み

2～3クラスで 1 つのグループを編成し、その中で児童生徒の課題や取り組みたいことなどを共有した。その中で ICT 機器を活用し、解決や改善ができる方法を探り、実践。実践した内容の報告会を行い、最終的に他学部と交流し内容の共有を行った。以上の内容をシートにまとめて記録した。

◂全校研究3回目の小中高混合グループに分かれての共有会の様子。
便利なアプリや ICT の使い方を共有したり、活用した教材を実際に教員同士で使ってみたりした。

1. 小学部の実践

〇対象とした児童について

身辺処理に時間がかかることや、言葉の理解が難しく視覚的な支援が必要な児童、また、心理的な面で気持ちのコントロールが難しい児童に対する支援の方法として、ICT 機器を使用した実践に取り組んだ。

小学部 2 年生で使用したアプリ

〇使用した ICT 機器について

今回対象とした全ての児童に対して、タブレットを使用した。児童 1 人に対して 1 台充てており、各児童専用の設定を保持することができることや、児童の課題にあったアプリを入れることができるという面から、児童一人ひとりに合わせた支援を検討する際に非常に便利であると考えられる。

支援の手立てとしては、keynote アプリを使用するグループが多かった。keynote アプリは、音を入れたり、タップすることによって変化するようアニメーションを付けたりできるなど、児童の実態に合わせた教材を作成できる。また、理想とする教材に合うアプリを見つけることの難しさも、keynote アプリが多く使用された理由として考えられる。また、動画や画像をタブレットで手本として提示する支援方法も見られた。

〇効果や課題について

タブレットを教材として提示することで、児童の興味関心を引き意欲的に活動に取り組むことができる反面、集中して取り組む際の弊害となってしまう場合もあった。児童の実態に合わせて提示の仕方に工夫が必要であった。また、タブレットを用いて手順を提示することを実践したグループが複数あったが、児童によって効果は様々であり、音や動きを付けることができる点から理解しやすくスムーズに取り組むことができた児童もいれば、刺激が多すぎるために分かりにくく、実物の絵カードを用いる方が効果的だった児童もいた。

授業内での使用に関しては、児童の実態が幅広く作業ペースが異なるという場面において、タブレットを用い、児童が自分でタブレットを見ながら進めていけるようになったというケースがあった。

教室で使用する際のタブレットの保管方法に対して課題が挙げられている。現在教材室に保管されており、いざ使用したい時に取りに行くことが難しく、タブレットの使用に対する不便さもある。

2. 中学部の実践

〇対象とした生徒について

発語が無く、意思疎通が難しい生徒や、集団に入ることが困難な生徒に対する支援の方法として ICT 機器での実践に取り組んだ。また、気持ちの切り替えが難しい生徒への支援方法についての検討を行ったグループもあった。

〇使用した ICT 機器について

小学部同様に、タブレットを用いての支援を検討したグループが多かった。生徒が要求したいことを表出する際の手段としてタブレットを使用したグループが複数あり、「エコミュ」や「Note」というアプリや、タブレットの読み上げ機能を用いて支援を行った。また、集団に入ることができず、授業への参加が難しかった生徒に対してタブレットを用いることで、それをきっかけに少しずつ教室に入ることができるようになったという事例も挙げられている。

また、タブレット以外には電子メモパッドを使用し、書くことで教員と意思疎通を図るという実践に取り組んだグループもあった。

〇効果や課題について

コミュニケーション手段として、タブレットが効果的であることが分かった。タブレットには、入力方法も選択でき、生徒の実態に合わせて、書く、選択するなどの方法がある。また、書いたものや選択したものが、音声としてフィードバックされる。誰に対しても分かるように伝えられ、生徒自身も正しく伝えられたことが確認できるという面から、気持ちを伝えて折り合いをつけられたり、自信を持ってコミュニケーションをとったりすることができたと考えられる。

一方で、タブレットの操作を覚えると、自分の好きなことに活用してしまう場面もあった。様々な機能を活用することができるようになればなるほど、使用する際のルールを徹底して確認しておく必要がある。現時点ではコミュニケーションをとるための手段として、タブレットを使用しているが、将来的には使用せずにやり取りができるようになることを目標としているグループが多く見られた。

3. 高等部の実践

〇対象とした生徒について

返事や挨拶、自分の気持ちを伝えるのが難しい、また発語が不明瞭なため意思疎通が困難な生徒や時間や場所や担当教諭の把握が難しい生徒に対する支援の方法として ICT 機器での実践に取り組んだ。

〇使用した ICT 機器について

他学部同様に、タブレットを用いての支援を検討した。動画やアプリ、音声再生機能等の機能を使用して支援を行った。具体的な活動内容や時間を動画で示したり、「コミュニケーション」のアプリを使用して自分の意思を伝える言葉を増やし、自発的な返事や挨拶につなげるために音声再生機能等を利用して、ボタンを押して返事や挨拶ができるよう促し、時間割を iPad で作成して、教科・クラス・主担名前を認識することで次の授業が確認することができるようになるような支援内容を継続的に取り組んだ。

高等部 1 年生が使用したアプリ

〇効果や課題について

タブレットを使用することで、手順確認や発声練習など繰り返し取り組むことができ、定着に繋がった。また自分の意思を伝える手段としても効果的であった。ただタブレットに興味関心がない生徒に対して操作を覚えることが難しく作業内容を覚えることが難しかった。

課題としては必要な時に自分ですぐに使えないことや ICT 機器を使うべき時と、使うべきでないとの区別をつけることが挙げられる。今後、ICT 機器を常時使えない（持ち運べない）場を想定し、絵カード等のアナログな手法へ移行することも有効な手段として検討していく。